

國立臺灣科技大學サマープログラム参加報告

25.Sep,2019

AY2019 “Taiwan Tech Summer Program”

Technology and Innovation Management, Tokyo Institute of Technology

鷲尾拓哉

0.概要

2019年8月18日から8月30日まで台湾・台北市に滞在し、國立臺灣科技大學のサマープログラムに参加した。45名ほどの学生の参加者は現地の國立臺灣科技大學および東工大を含む複数の日本の大学から専門、学年を問わず様々であった。プログラムは原則英語で行われ、大学での講義と企業訪問による学術的な研究と実際の企業活動の紹介で構成されていた。さらに、一部の現地学生とは同じ宿舎に滞在し、観光や言語交換といった課外活動も行った。



1.大学での講義

大学では複数の研究室で行われている研究を中心に、講義の受講し、実験を見学した。また、講義の中では文化差異の受

容や台湾と日本における教育システムの違いといった話題も紹介された。

Microbial Fuel Cell や Wound Dressing Material といった専門的な題材の多くが私自身の背景とは大きく異なったものであったが、教員、講義補助の学生ともに質問にも大変丁寧に対応していただき、見聞を広める機会となった。

現地の学生によると、大学での専門科目の講義の多くは中国語で行われることが多いとのことだったが、今回登壇したいずれの教員も非常に流暢な英語で講義を行ったことも大変印象に残った。



2.企業訪問

企業訪問の日程では台湾で活動する5社を訪問し、企業説明を受けたほか、社内を見学した。ULVAC Taiwan、KINIK Company、SYM Motors、台湾資生堂、GARMIN の5社

はいずれも専門性、産業領域、設立と発展の背景、規模などにおいて異なっている一方、国際的に活動しているという共通点を持つ。劇的に変化する 21 世紀の社会において、いかに企業活動を最適化していくか、いかに自社を市場で位置づけるかといった点についてはいずれの企業でも言及された。さらには、いかにしてこの変化する世界の中でキャリアを築いていくか考えるきっかけとなる講演も多く、ネットワーキングの機会としても有効に活用する事ができた。



3.課外活動

毎日のプログラム終了後には現地の学生とともに観光や言語交換といった課外活動を行った。現地の学生は毎日のように台北市内の観光地を案内してくれた。文化理解に対して有意義な時間であったと同時に、同じことを東京でホストとしてできるかどうか、どうするかについて問い直す機会としても印象的であった。

課外活動は、中国語を自習し始めたばかりの私にとっては発音規則や言い回しについて母語話者から学ぶことができる貴重な機会となった。言語交換については、帰国後も通話サービスを通して継続して行っている。



4.最終発表

最終日に成果発表として、現地の学生との混成チームを組み6分程度のプレゼンテーションを行った。2週間のプログラムを通しての学びと発想がテーマであったが、多くのチームの発表が食文化や交通といった文化的差異からの気づきであった。発表の中で直接言及された例は少なかったものの、高速道路の自動料金徴収システムや都市公共交通の設計を俯瞰したとき、技術立国を自称する日本のインフラ設計、普及戦略に疑問を呈するような議論を喚起するなど大変印象的な時間であった。

5.所感

参加者は日本の複数の大学と国立臺灣科技大学の学生の混成であり、専門性、学年、年齢等多様性に富んでいたと感じる。こうした状況では高度な専門性を扱うことは難しく、理解度についてもある程度の差が生じる点については想定された上で構成されたプログラムであったと感じた。

大学での講義への参加という経験を通して、台湾と日本の大学における講義の運営には共通するところが多いと感じた。いずれの場合でも教員による教授が講義

の中心に置かれ、質問や討議は理解度の確認という位置づけで行われているように感じた。昨年夏に参加したRWTH Aachen University でのサマースクールで見られたような学生同士、学生と教員との活発な討論はあまり見られず、学生から質問が出ることも稀であると感じた。休憩時間にある教員と交わした、いかに学生の発言を促すか、という議論は高校で非常勤講師を務める私にとっても興味深い内容だった。

歴史、文化の背景において多くを共有しているとされる台湾、日本だが、多様性の受容、国際的な開放性という意味では台湾のほうがより進んでいると感じた。同性婚に関する立法がニュースになったことは記憶に新しいが、台湾社会の寛容性から日本が学ぶべきところは大きいと感じる。通常とは異なる環境に身を置き、自らを省みる機会として大変印象的な滞在となった。

